

| | |
|----------------|---|
| 研究課題 | タブレット型端末を活用した学校不適應児童生徒への支援の方策について |
| 副題 | ～学力充実と心の安定のためのコミュニケーションツールの可能性～ |
| 学校名 | 亀岡市教育研究所 |
| 所在地 | 〒621-0242 京都府亀岡市宮前町神前長野15番地 |
| ホームページ アドレス | http://www.jh.city.kameoka.kyoto.jp/edulabo/index.html |

1 はじめに

亀岡市教育研究所は平成9年の開設以来、教育支援センターとして、不登校をはじめとする学校不適應に悩む児童生徒・保護者への教育相談事業の推進と適應指導教室の運営に、また学校不適應課題を対象とした調査研究活動に取り組んできた。

本研究は当研究所におけるこれまでの取組の成果を踏まえ、学校不適應を示す児童生徒の個々の安定と、進路保障につながる学力充実やコミュニケーションのための支援に、新しいツールの可能性を模索することにした。

特に不登校児童生徒については、学校生活において友達や先生と人間関係を築いていくことが苦手であったり、学習の積み上げが不十分であったりすることから、自己存在感や満足感を感じることができずにいることが多い。こうした中、これら学校不適應を示す児童生徒に対する学力保障や心の安定を図る支援等の有効な在り方について、新たなチャンネルが必要な状況であり、各学校において切実感のある課題となっている。また一方で、そうした児童生徒の中にはインターネットやメール・SNS(ソーシャルネットワーキングサービス)等においては興味を持ち、その活用についても関心が期待できる状況も見られる。

この現状を踏まえ、不登校児童生徒とかかわるツールとしてタブレット端末等最新モバイル機器(ipad)や、その機器を使つてのメール・SNS等を活用していくことで、効果が現れるのではないかと考えた。そこで、対象者及びその家庭にipadを提供し、人とのつながりや学習の機会を促すためのツールとして、また学校不適應の児童生徒への有効な支援策としてのICT機器が持つ可能性を検証していきたいと考えた。

2 研究の内容

コミュニケーション力向上の視点・カウンセリング的視点・学力充実の視点から当該の児童生徒に適切な支援の在り方とその展開、見通しを考える。

【対象児童生徒：A】

中学校2年生。現在不登校課題が見られ、当時は学校ともなかなか連絡が取りにくい状態にあった。

【具体的方途】

タブレット型端末4台を研究所担当者、対象学校担当者、対象生徒、適應指導教室担当者の4者

に配置し、双方間のコミュニケーションツールとして活用した。

〔具体的取組内容〕

- (1) ソフト紹介やその指導、支援を通じてのコミュニケーション力の育成
- (2) 電子メール等による保護者を巻き込んだカウンセリング的サポート
- (3) SNS を活用した思いの発信場面の設定とコミュニケーション
- (4) 学校、家庭等との連携等

3 研究の実践

(1) ソフト紹介やその指導、支援を通じてのコミュニケーション力の育成

A は京都市内の某私立学園に入学し、中1までの7年間を過ごしたが、学年が進むにつれ病気（ぜんそく、睡眠障害他）を理由に欠席する日数が増え、友人関係もうまく築けなくなり次第に不登校状態に陥った。

母はこの不登校状況を改善すべく、中学校2年の4月に居住地にある公立中学校に転入させたが、不登校傾向は好転しなかった。

長く校区外の学校に通学し、地域の間人間関係がほとんど取れない状態にあり、登校へのきっかけ作りに困り感を持つAや保護者にとって、電子ツールを媒体とした日常的なつながりや、電子ツールを中心に据えた直接的なつながりを持つという方途は非常に有効と考え、取組を進めた。

特に、ipadには魅力的なアプリが豊富にあり、Aにとっては興味が高まるような学習アプリも多くあったため、学習意欲の喚起にも非常に有効であった。

また、毎週1回、定期的に担任が家庭訪問を行い、ipadを使った学習や効果的な新しいアプリについて相談を行った。その中で、担任とAがコミュニケーションを深めつつ、ダウンロードした学習ソフトを活用しながらAとのつながりをより密なものとすることができた。Aにとっても、この取組をきっかけにして、少しずつではあるが周りとのコミュニケーションを取ろうとする気力を得ることができた。

(2) 電子メール等によるカウンセリング的サポート

連絡がなかなか取りにくい実態がある中で、直接会って話すという大きなハードルを少しでも下げ、メールを通じて連絡を共有していく取組を進めた。担任からは週2回、適応指導教室からも新しい行事がある度にメールを送るということで、本人にとっても無理のない頻度で連絡を取り合うことができた。

担任からのメールでは、学校の様子や様々な取組の情報を伝えた。生徒からの返信は毎回ではないが返信は続いた。この取組以前はよくつかめなかったAの状況が少しずつ見えてくるとともに、それ以上に担任とAとの関係が次第に深まっていくことが感じられた。また、Aのみならず保護者ともipadを通じてメール交換を行い、その中で担任が保護者とも細かくつながりながら関係を構築することができた。

メールを送ったからといって、すぐに返事が返ってくるわけではなかったが、特にコミュニケーションがうまく取れない相手に対しては、メールのように自分の都合のいい時間に返事が

でき、緩い関係で付き合い合えたことが、継続したつながりにつながったのではないかと考える。また、互いの様子を iPad を通じて日常的に共有することができ、「担任の先生は自分のことをいつも見守ってくれている」という安心感につなげることができた。

(3) SNS を活用した思いの発信場面の設定とコミュニケーション

今回の取組を進めるにあたって、iPad を活用してメールで連絡を取り合うだけでなく、Facebook を活用することで、ただ単に言葉で連絡を取り合うだけのツールとしてではなく、Face to Face で互いの信頼関係を築くことができ、A との関わりがより深まるように意識して取組を進めた。信頼関係の状況に応じて、メーリングリストや SNS を活用しながら仲間関係を広げ、生徒が自分の思いや気持ちを担任以外の人と交流したいと願ったときに、すぐにそれができる場として iPad が活用できるように、機器の使い方などを担任とのつながりの中で学ばせるようにした。

9月のある日、適応指導教室の iPad に、A から「テストで 100 点を取ることができた」とうれしそうな顔を映した写真付きのメッセージが届いた。自分の素直な気持ちを自ら発信して周りに伝えたいという A の行動が、非常にうれしい A の変化であった。その変わり目に iPad があり、他者とつながりたいという A の思いが、機器を上手に活用することで、自分のタイミングで実現することができた。

(4) 学校、家庭等との連携等

学校から直接 iPad を貸与することは、教師と生徒同士の私的な情報交換というよりも、学校体制として取組を進めていることを家庭に示していくことにつながり、より学校と家庭連携が深まった。iPad はアプリがたくさんあり、ともすれば遊びのアイテムになってしまう機器でもあるが、機能を一部制限し、アプリのインストールは担任や保護者が行うというルールを明確にすることで、コミュニケーションや学習のためのツールとするねらいも全員が共有しつつ取組を進めることができた。

A との連絡のみならず、保護者との連携にも iPad が有効に機能した。保護者自身が担任や適応指導教室とつながりを持ちたいという意欲にもつながり、A の気分が乗らないときには母親からのメールもたびたび届いた。また、iPad を通して、A の周りにつながっていく様子を A に見せることは、「A のことをみんなで見守っているんだよ」というアピールにもつながった。

iPad の話題を中心に据えた担任による家庭訪問を毎週 1 回は行い、顔をつきあわせてのコミュニケーションを図る取組も継続しておこなった。最終目標は A の学校復帰であり、iPad を介さなくても繋がることのできるネットワークや A のコミュニケーション力についても、少しずつ成長が見られた。

3 研究の成果

(1) ソフト紹介やその指導、支援を通じてのコミュニケーション力の育成に係わって

最初の段階では、アプリの紹介をおこなうことが双方向の通信をおこなう理由となり、やりとりが積み上がっていった。iPad そのものが持っている魅力は、コミュニケーションが取りにくい・取ろうとする内的意欲が弱い A のような生徒にとっては新たなチャレンジをしようとする意

欲にもつながり、Aの現状打開には非常に合ったツールであった。

互いがコミュニケーションを取るためには、話の柱となる話題が必要になってくるが、話のきっかけとして常にipadを中心に据えることで、つながる機会を作ることができたことは大きな成果であった。

(2) 電子メール等によるカウンセリング的サポートに係わって

学校から家庭にいる不登校生徒に対し、学校での取組情報を提供し、担任と生徒との関係を構築するためのメールは有効であり、メールの交換は、担任と生徒との距離を取りながら関係を結ぶのに大変便利なツールであった。また、文字だけではなく、写真等は美しく、大きく映し出され気持ちを和らげ安心させてくれるものであった。

不登校の要素として、担任との関係が築きにくいことがある。Aにとって担任が自分のことを理解してくれているという気持ちにさせるには、担任とのかかわりの中で共有できる体験等が必要となる。ipadを通してよせられる担任からの情報は、直接かかわらなくとも子どもに伝えることができる。一方、生徒からの情報を担任が受けとめることは、自分の存在感を理解してくれているという安心感をもつことにつながったと考える。

学校から発信する情報は、生徒の不安を取り除くことだけでなく、生徒が何かをしようとしたときに直接問い合わせることなく、間接的に情報を得ることができるツールとして活用できる。また、担任に気持ちを聞いてほしいときに、ipadを使用するとメールや写真等のやりとりで、担任本人に伝えることができる。他の教師や保護者をとおして相談すると色々なことを思われているのではないかと不安がつる場合がある。自分のタイミングで会話できるタブレット機能は有効な道具となり、Aのような児童生徒をサポートする手段として活用できることが分かった。

(3) SNSを活用した思いの発信場面の設定とコミュニケーションに係わって

担任とAの関係を保つ上では、ネットメディアは極めて有効である。集団適応支援の段階においても、メールはもちろん、メーリングリストやSNSを活用しながら仲間関係が保たれていることがしばしばある。その窓口としてのipadを活用してつながりを広げていきたいというねらいであった。Aにとっては自分の周りの人たちとのつながりを深めるための手段としてのipadの存在は有効なものであった。

(4) 学校、家庭等との連携等に係わって

担任の問いかけに対してAが反応を示し、メール等のやりとりができたことは、その過程で徐々にお互いの信頼感が築かれてきたと感じている。このようなやりとりについては、保護者も大変喜ばれ、担任との連携が一段ととりやすい状況になってきた。このように、みんなが見えるタブレット型のツールを使うことで、携帯電話のメール機能とは違うオープンなつながりが取れ、個人同士のつながりではなく学校と家庭とのつながりという形が取れたことは大きな成果であった。

また、毎週1回の家庭訪問を継続して行い、お互いの顔が見える状況も併せてつくっていったことで、ICT機器活用によりあちな通信の一方通行を防ぐことができた。この視点で見ればタブレットのツールがとても効果的に機能することが分かった。

4 研究における課題点

(1) 機器活用によるネットワークの広がりについて

機器を活用してつながりを作るということは、別の角度から見れば、その機器を持っていないければつながれないということである。担任とのつながりを深めることはできたが、それ以上のつながりを広げることはできなかった。

Aが自分の思いや気持ちを担任以外の人と交流が図れることができれば、人とかかわることの楽しさを実感し、少しでも学校復帰への意欲と自信を高めることができればと考えたが、そこまでの段階まではまだ時間がかかる状況である。

(2) 学習支援の視点からの活用について

学力向上という視点で見れば、現状の中でICT機器の活用でできることには限界があるということが改めて分かった。当初はAにとっては珍しさもあり意欲的に取り組む姿が見られたが、使い方に慣れてくるとソフトによる単調な学習は目新しさもなくなりマンネリ化していった。

継続的に基礎学力を高める手段として生徒が活用していくためには、ipadのSNS機能を生かし、離れた場所にいながらも他者と繋がりがながら共同学習をするなどの指導の工夫が必要で、そのためにも学校が用意した学習教材と重ねた教材研究が必要となる。

5 おわりに

今回の取組においては、不登校児童生徒の心に寄り添う手段として、ipadを活用してコミュニケーションを図り、その結果、生徒のみならず保護者とのつながりを回復することができた。家庭訪問や電話ではなかなかつながれない児童生徒にとっては、ipadなどの情報端末機器が効果的に働くことがこの研究を通して確認できた。

今後、各校においては、タブレット型の情報端末機器がどんどんと導入されていくことと思われる。児童生徒にとっては更に身近なツールとして広まっていく事を考えると、今回の研究のように、困り感を持つ児童生徒や保護者にとっては、つながりをより広げていけるきっかけとして情報端末機器が有効活用できると考える。担任とAとが広げてきたこのネットワークを、次は他の教師・学級の友人等とつなげることで、今後とも不登校状態の解消を目指していきたい。